
とりあえず剣道部

ナタデ恋々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず剣道部

【Nコード】

N0316X

【作者名】

ナタデ恋々

【あらすじ】

仙台からの転校生、最早たみは全国模試十二位の秀才にも拘らずスポーツはゲートボールからアメフトまでこなし、料理や書道に巻き舌まで出来ちゃう超オールマイティ少女。おまけに美少女で性格も素直で優しいから男女問わず人気者の優等生。

そんな彼女の入った部活は校内の落ちこぼれを強制収容したマキシمام弱小剣道部だった……。

たみは個性的で強烈な部員達に困惑しつつも、別居中の母親（医者と不倫中）に実の娘と認めてもらえるよう、剣道部を新人戦優勝

とりあえずプロローグ「生徒A」（前書き）

この物語は岩手県の小さな農村で起こった少年少女達の奇跡を描いた感動巨編である……多分。

とりあえずブローグ「生徒A」

とりあえずブローグ「生徒A」

ここは岩手県の内陸にある小さな農村、小沢村。県内で唯一のジヤスコがあることで有名である。と、村民は思い込んでいる。実際はジヤスコの店舗名が小沢店でなく朧岡店となっているため、村外の住民は小沢村を朧岡市内と思い込んでいるのであった。東京デズニランドが千葉にあるのと同じ原理である。

そんな小沢村の中心部には村で一番高いビルがある。三階建ての村立小沢中学（略称、沢中）である。今は二学期始業の朝ということもあり各教室はいつも以上に騒々しい。その中で一のAは特に騒がしかった。

「転校生が来るらしい」

この一言で学級の空気が一変し、閑静な住宅街から渋谷のスクランブル交差点に変わってしまった。

そんな喧騒の中、一人だけ顔を伏せて居眠りをしている男子生徒がいた。以後「生徒A」と呼ぶ。

Aは居眠りをしているのではなく、顔を伏せて周りの会話に耳を傾けていた。

いわゆる盗聴。

「あーだるい」

そんな事みんな思っている。いちいち声に出すな。鬱陶しい。

「今年の夏休みは全然遊べなかったよう」

じゃあその満足そうなにやけ面は何なんだよ。鬱陶しい。

「ねーねー数学の課題、写させて」

コイツはいつも写してもらっているくせに何で俺よりも成績が良
いんだ。鬱陶しい。

「休み明けテストの勉強、全然してねえよ」

何のアピールだよ。お前の頭が悪い事なんて今に始まった事じゃ

担任の「転校生さんは入ってきて来てください」の一言で転校生への期待感は学級全体のものとなる。「不覚」と思いながらもAはその一部に含まれていた。

学級の期待と同じくらい転校生が緊張しているというのに。

ガラガラガラ。転校生が入ってきた。

どえらい美少女だった。

目が大きく、小鼻で小顔の整った顔立ちでキメ細かい白い肌が輝く。ツヤがありサラサラと風で靡く黒髪はポニーテールに結ってある。無邪気で澁刺とした笑顔にはどこか色気を感じ奥ゆかしい。

アイドル顔負けの容姿をしていた。どっかのデブのプロデュースがなければ、四十八人束になっても勝てっこない。

「初めまして。仙台から来ました。最早たみです。五歳まで、ここ小沢村に住んでいました。その頃は小沢幼稚園に通っていました。同じだった人いますか」

A以外の全員が手を挙げていた。「これだから田舎って奴は」とAは嘆いたが、彼もまた小沢幼稚園だった。

転校生は「山田先生もですか」と茶々を入れて笑いを集めていた。別に面白くねえよビッチ。Aの顔が強ばる。

「幼い頃に住んだとはいえ、新しい環境でまだ慣れない事も多々ありますが、何卒宜しくお願い致します」転校生は深々と一礼した。クラスの連中は盛大な拍手で転校生を歓迎する。一部男子は転校生に見蕩れて目が虚ろになっている。Aはビニール袋で呼吸をしている。

「それでは最早さんの席は一番後ろで、A君の隣のです」

転校生は「はい」と大きく返事をしてAの方へ向かってくる。

Aの過呼吸は加速した。ブス専のAにとって今の状況は「美少女転校生が俺の隣の席に!？」というラブコメ展開でなく「いけ好かない女が俺の隣の席を奪う」だった。

「よろしく。席が隣同士になったのも何かの縁だし、お互い仲良くやって行きましょう」

転校生はAに握手を求めたがAはビニール袋から手を離さなかつた。

*

「全国模試十二位って本当なの」

「まあ、はい」

「どこの塾に通っていたの」

「塾は通った事ないけれど」

「ええ嘘でしょ、じゃあ巻き舌が出来るのも」

「はい、はふ」

「スゲー巻き舌だ。生で初めて見た」

巻き舌くらい誰でも出来るだろう。Aは舌を中心に寄せたら治りかけの口内炎が歯にあたり、激痛がわさびの辛味のようにツーンときた。

朝学活が終わり、Aの隣の席には人集りができていた。理由は言うまでもない。人ごみの苦手なAは収まりかけていた過呼吸が復活する。

「小学校の時、ラグビーで全国大会いったんでしょ。アメフト部に入ってたよ」

「ごめんなさい。私ラグビーじゃなくてタグラグビーなんだ。タックルがないヤツ」

「ええ、じゃあマネージャーでもいいから。もし最早さんがマネージャーだったら……死んでもいい」

「大変だ、吉田が死んだ」

「私って罪なオンナ……なんてね」

「アハハハ、たまちゃんおもしろーい」

だから面白くねえよ。それに何だよ、この茶番。鬱陶しい。

「アメフト部に入らないならどこの部活に入るつもりなの」

「剣道部に入ろうかなって、前の学校でもやっていたし」

「けっ剣道部……」

教室中に不穏な空気が漂う。そしてたみを除く全員の表情が固ま

る。無理もない。この学校での「剣道部」は、ハリー○ッターで例えると「ヴォルデモート」、ナ○トで例えると「九尾の子」並みの禁句であるからだ。

始業のチャイムと共にたみを取り巻く人集りは無言で散っていった。

一時間目が始まってからも不穏な空気が漂っていた。そして、

「先生、吉田君がまだ死んでます」

「よし、吉田はチャイム席バツで一点減点な」

「私って罪な女……」

「たみちゃんおもしろーい」

とりあえずプロローグ「生徒A」（後書き）

受験勉強の息抜きで始めました。

小説は愚か、パソコンで長い文章を書くのが生まれて始めてです。文句でも良いので是非感想をください。

楽しみに待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0316x/>

とりあえず剣道部

2011年9月25日04時32分発行